



<メモ>県内にスタッフがいる面会交流支援団体は、「びじっと」(横浜市)と「ウインク」(千葉県船橋市)の2団体がある。県内に本部を置く団体はまだないとみられる。県は本年度、①県内在住②児童扶養手当の受給と同様の所得水準であるなどの条件を満たす両親を対象に、交流支援事業を実施した。

# 心の整理できずに困惑

厚生労働省の調査によると、1950年代、親権者は父親が過半数を占めたが70年代に逆転し、90年代以降は「母親割」の状態が続いている。面会交流を求めても会えなのは、父親が多い。親権を得た母親たちはなぜ、子どもを会わせたがらないのか。

静岡市でシングルマザーを支援する「シングルペアレント101」は昨年、離婚数年の段階で、

県中部の30代女性は「離婚調停で絶対に顔を合わせないよう配慮してもらつたのに、離婚後の面会になると『あとは2人で』と放り出される」と不満を語る。40代女性は「元夫に会うと、相手が絶対優位のパワーバランスに引き戻されて苦しむ。日程調整を求める普通の文面のメールさえ『会えなければこちらから行く』と脅迫のように感じ』」という。

## 「わが子に会いたい」 離婚と面会交流

4

悩みながら面会交流を続いている母親たちの座談会を設けて実態を探つた。「結婚中のつらかった出来事を思い出す」。多くがそう語り、離婚の遺恨を抱えたまま、面会交流に臨むことに困惑していることが分かった。

母親は面会交流に同伴しなくとも良い。父親の中にも「同伴されると、子どもが顔色をうかがう」と反対する声が根強い。しかし母親たちは自分が見ていないと不安」と口をそろえる。

子どもが、面会で父親への思慕を募らせていくことに戸惑う母親も少なくない。県中部の30代女性は娘に「パパと一緒に暮らしたい」と懇願され

「101」の田中志保代表は「日程調整や同伴を一人で行うことは、心理的な負荷が大きい。離婚から数年と間もないちは特に、前向きにはならない」と指摘し、第三者による継続支援の必要性を強調する。

県内には少ないものの、面会交流の付き添いや日程調整などを、両親の同意の下で行う支援団体は各地で増えつつある。「びじっと」(横浜市)の古市理奈代表理事も「支援を受けて初めて冷静になる親は多い」と語る。

こちら女性編集室

Women's CHOICE